

説教 『一人の預言者となる』 山本 護 牧師
聖書 エレミヤ書 22:1~5 / ローマの信徒への手紙 13:1~7

今日は、あえてこんな聖書箇所を読んでみたい。「人は皆、上に立つ権威に従うべきだ。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだから(マ 13:1)」。こうして7節まで「支配者への従順」が説かれる。「今日」は、1945年、広島に原爆が落とされた日と、長崎に落とされた日に挟まれている。だから「聞きたくない」この御言葉にも、じっと耳を澄ませてみよう。

軍国化する日本にあって、我国の牧師や神学者はこの聖書箇所をどう読んでいたのだろうか。調べてみると1930~40年代、「ロマ書13章」を解した文書が盛んに公にされている。軍国におもねるものかと思いきや、そんなことではなかった。ルターのような聖俗二権を唱えるものであったとしても、弾圧のただ中でなんとか信仰を貫こうとする、キリスト者たちの引き裂かれた状況が垣間見られる。イエスは「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい(マタイ 22:21)」と鮮やかに応じた。だが、そんな格好いい斬り返しでは通り抜けられない、陰湿な圧迫の中での、すれすれの言説であった。

国策批判で東大教授を罷免された矢内原忠雄は1942年、個人誌でロマ書の講義をした。矢内原は「13章」を解する上で、直前の御言葉を前提にした。「愛には偽りがあってはならない。悪を憎み、善から離れず、兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい(マ 12:9~10)。「上に立つ権威(13:1)」、その頂点の天皇さえも「愛」によって相対化したのではないか。

矢内原は語った。「信仰にとって悪は憎み、善はしたしみつつ権力に服従する時、始めてその服従は偽善的とならず、自由なる、義しき、良心的なる服従となるのであります。之によって我々は一方に於いて国家の腐敗の場合之を責める預言者であると共に、他方に於いて常に国家の権力に対する良心的服従者たり得るのです。否、国家権力が神より出でたものであることを知って之を重んずればこそ、それが濫用せられる時預言者は黙さないのです」。服従とは、自由で、良心的な精神の発動なのだと。

勇ましい反権力は、権力にすり寄ることと同じく単純な二項対立で分かりやすい。だが矢内原が語る場所は神に従う者の、率直で誠実な現実。そもそもキリスト者の在り方とは、熱狂を伴う両端の主義とは無縁なものではないのか。矢内原の言葉を胸に納め、改めてロマ書に向かうと実に新鮮だ。

「あなたは権威者を恐れないことを願っている。それなら、善をおこないなさい(13:3b)」。支配者にとって「善」とは何か。「実際、支配者は、善を行なう者にはそうではないが、悪を行う者には恐ろしい存在(13:3a)」。支配者自身が善か悪かは、時代状況で常に流動する。なにしろヒトラーでさえ救世主だったのだから。ただどんな支配者にとっても、「善」はもともと圧迫しづらいもののようなのだ。

矢内原は言う。良心的服従者であるためには、他方で国家権力に対する預言者でなければならぬと。預言者は、御言葉を「預る」神の権威のみで、国家権力に対して正義と公平を要求し、恵みと真実に従えと命ずる(エレミヤ 22:3)。従うなら権力を認め(22:4)、従わぬならば滅びると警告する(22:5)。私たちは愛と善に従い(マ 12:9)、霊に燃えて主に仕え(12:11)、聖霊に捉えられた一人の預言者となる。



【おまけのひとこと】

キリストに仕えるがゆえ人に仕える 世の一員として特定の歯車となることもあろう 歯車はキリストに反すればとたんに停止する 逆回転するには内側であるほど動力が必要 その拉ぎは甚大